

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 1 日現在

機関番号：14701

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820028

研究課題名(和文) 巡礼記・参詣記についての文献学的研究 院政期の南都・熊野・高野を中心に

研究課題名(英文) A Philological study of texts of pilgrimage-about NANTO, KUMANO and KOUYA-san in Cloister government period

研究代表者

大橋 直義(OHASHI, NAOYOSHI)

和歌山大学・教育学部・准教授

研究者番号：50636420

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題による研究成果は、殊に南都圏の縁起・巡礼記に関連したもの、熊野参詣およびその周縁(紀州地域)の巡礼・参詣資料に関連したもの、軍記物語・私撰国史などの縁起・巡礼記資料と密接な関わりを持つ資料群についての検討、の三点におよそ概括できる。それ以上に、本研究課題の推進したことによって、和歌山県地域における各寺社との連携体制を拡充できたことが何よりの成果と言える。

研究成果の概要(英文)：Study results of this research project are :(1)results about historical tales of NANTO temples and texts of pilgrimage,(2)result about texts of pilgrimage to KUMANO and surrounding area,(3)results about Japanese war chronicle and Japanese historical texts(private compilational). And furthermore, this research project contributes to the expansion of cooperation systems among temples and shrines in Wakayama prefecture.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：巡礼記 巡礼 参詣 縁起 縁起集 軍記物語 私撰国史

1. 研究開始当初の背景

そもそも聖地・霊地に赴き、その恩寵に浴そうとする営為は、日本国内に限ったことではない。個々の文化にとっての「はじまり」の地である「聖地」、神仏との連なりが最も濃密な「霊地」、往古の先達が経めぐった空間である「巡礼地」に自ら赴いてその足跡をなぞり、その「記」を記し留めようとする営みは、人類にとって普遍的な文化と位置づけることが可能であろう。

そうであるにも関わらず、日本国内における研究の動向は、これを等閑視してきたと言ってもよい。わずかに、院政期に南都を巡礼した際の「記」である『七大寺日記』『七大寺巡礼私記』『南都巡礼記』（『建久御巡礼記』）や、熊野・高野の参詣記（の一部）が『校刊美術史料 寺院篇』（藤田経世編、中央公論美術出版、1972）、『九条家伏見宮家旧蔵諸寺縁起集』（宮内庁書陵部編、明治書院、1970）、『群書類従』『史料大成』等の叢書類に翻刻紹介されてはいるが、国内における研究が未発展であった第一の理由は、既存の研究分野（文学・史学・仏教史学・美術史学・交通史学…）のいずれにとってみても、この種の資料群が主たる研究対象ではあらず、あくまでも「補助資料」に過ぎなかったということにある。巡礼記・参詣記資料を読み込み、その表現の特質を

見極めること、他の同時代の資料（諸寺社の縁起やその集成たる縁起集、また軍記物語・私撰国史等の歴史叙述関連資料）との関連を検討すること、伝本を博搜した上でその系統論を構築すること等の「文学」研究のための基礎作業は全くといってよいほど等閑に付されてきたのだ。これは例えば美術史学分野においても同様で、南都の巡礼記は、南都諸大寺に収蔵される仏像・什物の当時の尊容を知るため参照されてきたに過ぎなかった。事実、代表者が拙著『転形期の歴史叙述 縁起巡礼、その空間と物語』（慶應義塾大学出版会、2010）に収録した学術論文・資料紹介において明らかにするまで、巡礼記資料として最も言及頻度の高かった『南都巡礼記』についてさえ、その伝本系統も明らかにされてこなかったばかりか、質の異なる二伝本を取り合わせ、現実には存在しえなかった上記『校刊美術史料』所収本文が利用されていたのである。

代表者は、軍記物語や私撰国史等の中世の歴史叙述を検討する過程において、中世における「知」の一翼を担う場としての寺社に注目し、「人」の歴史叙述たる系図・血脈と、寺地・堂舎・仏像・什物など、「寺」の歴史叙述たる縁起（その集成としての縁起集）を主たる対象に据え、研究活動を行ってきた。その検討作業の中で、上代の「流記資財帳」を端緒とする寺社の縁起を、寺社内部から外部（公権力）に対して発信される歴史叙述として位置づけた際、「外部 内部」という逆

の構造を有する歴史叙述としての巡礼記・参詣記資料そのものにも着目するようになった。

このような視点にたつて、主要な検討対象として巡礼記・参詣記を見た場合、これまでの「補助資料」としての域を超えた、「文学」研究の対象としての可能性を秘めていることが明らかになった。その第一は、実際の巡礼・参詣を表現の制約的基盤としていながらも、戦災等によりその時期には存在してなかった事物についてさえ、巡礼者にとっての「あるべき歴史」として、見ていないものまで記し留める場合もあるということである。これは、他の「文学」作品と同様の恣意的表現行為と見るべきもので、ここに巡礼者の歴史観が反映され、一つの「作品」としての検討に堪えうるものとする事ができる。第二に、特に院政期の南都巡礼記を通観した際、仁和寺園の歌学（六条藤家歌学書）との関連が浮き彫りとなった。これは、寺院外部から「古都」への巡礼・参詣の目的として、和歌詠作と歌学的検討という観点が存在することを意味し、後代の連歌師・俳諧師による「旅日記」との文化的連続性を示すものと位置づけられる。第三に、巡礼記・参詣記はその巡礼を行った主体だけのためのものではなく、幾度となく転写され、時宜に応じた新たな巡礼記として再生産されることも分かってきた。これは、過去の巡礼・参詣とその「記」が後代の巡礼者にとっての「典故」として享受されるだけでなく、説話集や縁起集、物語作品等に「古典」として引用されることと関わり、その過程において、現存しない巡礼記・参詣記が多数存在し、参観されてきた様相が明らかになってきたのである。

如上の研究活動の結果、さらに検討を要する側面が複数にわたって存することもまた、明らかとなった。第一に、代表者がこれまで検討を重ねてきた南都の巡礼記・参詣記以外にも四国・西国等の巡礼の「記」が存在することは知られているが、それら著名な巡礼地・聖地・霊地についての「記」についてさえ、その全貌は明らかになっておらず、ましてや時代を近世期まで下らせたなら、地方の「ミニ巡礼地」と呼びうる空間の巡礼記・参詣記が未紹介のまま放置されていることである。これらの全体像を明らかにすべく、基礎的な文献学的検討を加えることは、文学研究のみならず、隣接諸分野の研究にも資し、また国外の巡礼についての「学」との照応も可能とするはずだ。第二に、巡礼記・参詣記が巡礼主体以外にとっても「古典」としての意味を有することが明らかになった以上、軍記物語・私撰国史等の他の歴史叙述文献や寺社の縁起とその集との間の引用・被引用の関係についてさらに検討を進める必要がある。このことによって、中世日本における歴史認識・空間認識のありかたについての知見に新たな地平を拓くことは間違いない。とりわけ、寺院経蔵文献の悉皆調査が進展している昨今、その寺社の歴史叙述を寺社内外から見わたし

うような複眼的視座を構築することにも連なる課題であると考え。

2. 研究の目的

日本国内には、南都・四国八十八箇所・西国三十三箇所といった巡礼地、また高野・熊野・伊勢といった聖地・霊地が数多く点在している。院政期から近世期にかけ、人々は貴顕・衆庶を問わず、その地に巡礼・参詣し、自らの体験を記すばかりではなく、その場の案内者たる先達やその寺社に止住する僧や堂童子の階層の者たちから、その空間・建造物・什物らの由来・縁起を見聞し、帰洛後、時に関連資料を追記するなどして、巡礼記・参詣記を著した。本研究計画は、いまだ資料目録すら完備されていないこの種の資料群の全貌を把握するべく、各地の寺院経蔵・図書館・特殊文庫に伝存する巡礼記・参詣記に対して文献学的検討を行い、文学研究および隣接諸分野を含めた各研究手法からの今後の更なる考究を可能とするための基礎的調査計画である。

3. 研究の方法

日本中世から近世期における巡礼文化、および巡礼記・参詣記の全貌を明らかにするという目標のもとに、その基礎的作業として、南都諸寺の巡礼記・参詣記資料の文献学的検討のさらなる進展と、高野・熊野への参詣記の博搜と文献学的検討、目録化を目的とする本研究は、次のような方法をとる。

第一に図書館・特殊文庫・寺院経蔵に収蔵される巡礼記・参詣記資料の博搜・調査に始まる文献学的検討と目録化。第二に、南都・高野・熊野への巡礼路にあたる大阪府南部・奈良県・和歌山県内に存する寺院のうち、多くの書籍が伝存しながらも未だ調査の手が及んでいない寺院経蔵とその内実を把握し、さらなる調査検討のための経路を獲得すること。第三に、如上の手順を経て知りえた諸資料に対してその言説分析を行い、他の縁起集・軍記物語・私撰国史や絵画資料などとの関連のありかたを理解するための、巡礼記・参詣記データベース構築に向けた基礎的作業を行うこと、である。

4. 研究成果

本研究課題による研究成果はおおよそ次のように概括できる。

(1) 研究の主な成果

発表論文・口頭発表(講演)等は後掲の通りだが、その内容は、殊に南都圏の縁起・巡礼記に関連したもの、熊野参詣およびその周縁(紀州地域)の巡礼・参詣資料に関連したもの、軍記物語・私撰国史などの縁起・巡礼記資料と密接な関わりを持つ資料群についての検討、である。このうち、特筆すべきこととしては、代表者が長年たずさわっ

てきた『南都巡礼記』の注釈作業が佳境を迎えつつあり、今後数年の間には公刊しうる見通しも立ち、その過程で検討を進めてきた「寺社圏」全般に関わる論文集の公刊に至ったことである(後掲図書)。その他、言わば無形の研究成果として、上記企画とも関連するが、説話文学会(和歌山大学例会、2013.12)におけるシンポジウム「根来寺の輪郭 空間・資料・人」コーディネーターおよび同学会におけるエクスカージョン・資料展観の企画・コーディネートを通じ、本研究課題の本旨でもある、紀州地域の各寺社との緊密な連携体制を築けたことも指摘できる。

(2) インパクト

全国規模の学会における口頭発表・論文発表をいまだ経ていないため、はかりかねるところもあるが、後掲[図書]が公刊された折には、相応のインパクトが見込まれ、これを含めた公刊作業により、代表者を含めた研究活動全体の進捗が期待される。

(3) 今後の展望

上記(1)でも記述した紀州地域における資料博搜体制の充実は、寺社に限ったことだけではなく、代表者の勤務校の付属研究所たる紀州経済史・文化史研究所の管理運営にも携わる立場を得たことによって、同研究所の支援をあおぎつつ、また和歌山県立博物館とも協調しながら、さらなる資料博搜を目指す素地を築くことができた。この体制は、代表者が続けて申請・採択された科研費(基盤C)「大和・紀伊における巡礼空間とその資料についての文献学的研究」においても、十分に機能するものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

大橋直義、シンポジウム「諸本の研究の可能性」、軍記と語り物、査読無(依頼)、50、2014、印刷中

大橋直義、中世参詣の視点から、仏教文学、査読無(依頼)、38、2013、p52~54

[学会発表](計 9 件)

大橋直義、熊野詣のはなし 参詣記と物語を読みとく、和歌山大学浪切サロン(講演) 和歌山大学岸和田サテライト、2014.1.15

大橋直義、『法華滅罪縁起』について、鑿の会例会、京都市内、2013.12.24

大橋直義、『扶桑略記』研究の可能性、国文学研究資料館共同研究「歴史叙述と文学」第一回研究発表会、国文学研究資料館、2013.8.27

大橋直義、巡礼・参詣と文献学 平維盛の粉河寺巡礼を中心に、和歌山大学学内

研究交流会、2013.5.17
大橋直義、架蔵〔浄土真宗説話抜書〕(〔江戸中期〕写、四巻四冊)について 説話利用という観点からの展望、関西軍記物語研究会、大谷大学、2013.4.21
大橋直義、東大寺「銀堂」「羅索堂」をめぐる諸問題、鑿の会例会、大阪市内、2013.3.30
大橋直義、藤原氏と海女 能「海土」の源流、和歌山大学まちかどサテライト・歴史かふえ(講演)、和歌山大学まちかどサテライト、2013.1.18
大橋直義、中世の巡礼・参詣から、仏教文学会シンポジウム「寺社参詣の展開と変容 中世から近世へ」コメンテーター、専修大学、2012.12.8
大橋直義、巡礼記・縁起集以前 平安期寺院史学の一側面、巡礼記研究会シンポジウム「巡礼記研究の視界」パネリスト、神奈川県立金沢文庫、2012.10.13

〔図書〕(計 5 件)

大橋直義・藤巻和宏・高橋悠介編『中世寺社の空間・テキスト・技芸 寺社圏のパーспекティヴ』、勉誠出版、2014.6、刊行前のため総頁数不明、分担：大橋直義「【総論】「寺社圏」のパーспекティヴ」、大橋直義「【第一章概説】寺社の空間と言説 「寺社圏」としての南都に及ぶ」
延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈第四(巻八)』、汲古書院、2014.5、518(共同執筆のため担当箇所抽出不可能)
延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈第三末(巻七)』、汲古書院、2013.5、683(共同執筆のため担当箇所抽出不可能)
小峯和明編『日本文学史 古代・中世編』、ミネルヴァ書房、2013.3、分担：大橋直義「紀行・巡礼」、179~183
徳田和夫編『中世の寺社縁起と参詣』、竹林舎、2013.3、分担：大橋直義「巡礼記と縁起集 寺院空間の「歴史学」」、173~197

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
特になし。

6. 研究組織

(1) 研究代表者
大橋 直義 (OOHASHI, Naoyoshi)
和歌山大学・教育学部・准教授
研究者番号：50636420

(2) 研究分担者 ()
研究者番号：

(3) 連携研究者 ()
研究者番号：